

---

cry

R@

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

c r y

### 【コード】

N 8 2 3 9 B

### 【作者名】

R @

### 【あらすじ】

花屋で出会った今まで関係を持った事の無い様な青年晶との、初めてした綺麗な恋。

アイラインで流れた涙に黒みが掛った。  
可愛いウェディングドレスが飾ってあるショウケースに自分が映る。  
それを見ると同時に白のウェディングドレスを目に映す。

『…くそッ！！！』

ガツンとすぐ近くにあった自販機のゴミ箱を蹴りあげる。  
周りの人達は、驚いて目を私に向けるが、すぐに視線を元の場所に  
戻す。

私は手の甲で涙を拭って、行くあても無いまま歩き進めた。  
私がこんなことになったのは、あのクソ野郎のせい。大好きだった  
のに。愛してたのに。どれだけアイツなんかに貢いだことか。その  
ために、お水の仕事だった。クラブで出会った男と私は結婚す  
る筈だった。けれど、いきなり消えたアイツ。

向こうの家に同棲していたから、帰る家も無い。友達の家にも泊  
めてもらおうかと思ったが、携帯もどこかに無くして、持っている  
のはポケットの中の500円玉のみ。稼いだお金さえ、アイツに預  
けていて、本当に何も無い。

【とりあえず、今日はブラブラしていよう。

それで、友達を見かけたらお金借りて、姉のいる福井にでも帰ろう】

そう考えていた。

ふと目についた、花屋さん。

【フラワーショップ藤】

最後の500円。洒落て花でも買って終わろうか。そう考えて、花屋に足を踏み入れた。

「いらっしやいませ」

中から出てきたのは、私とは一生関係を持つことは無いだろう、そう思われる黒髪の男。少し痩せ型で、ピアスの穴どころか、アクセサリーさえついていない。こう言うのを“青少年”とでもいうのだろうか？

「どんな花をお求めですか？」

「これで」

ポケットに入っていた500円玉を取り出して、店員に見せた。

「これで買える花、頂戴」

「はいッ!」

そう笑顔で気持ちの良い返事をして、花を選び始めた。

「プレゼントですか？」

「ううん。気分で」

「気分…ですか……何色が好きですか？」

「…オレンジ」

「僕も好きです」

「あ、そ」

ひとつひとつ、慎重に選んでいく。私なんて多く来る客の1人なのに。ここまで真剣に考えている。

「どうですか!？」

いきなり、目の前にだされた綺麗な花束。オレンジの花びらが大きい花が主になって、黄色の花と白の花が添えられている。

「…」

「…気に入りませんでした?」

「綺麗…なんだけど、私、こんなに買える程、お金持って無い…」

けれど、彼はにっと笑って

「気分です」

そう言った。

「いいの?店長さんに怒られない?」

「…」  
「…」  
「僕のお店だし」

「…アルバイトだと思った。ごめん。すこいね」

「半年前に、父を亡くしたので、今じゃ僕がこの店長です」

「…この花、素敵。ありがとう」

「ラッピングしますね」

「そんなことしてたら、儲かないよ」

「いいんです。この店は趣味みたいな物ですから。ちゃんと他のところでバイトしてます」

薄いピンクの包装紙と、赤のリボンを取り出した。

「…しっかりしてるね…いくつ？」

「21です」

「わ、すごい、一緒だ。年下だと思った」

「何ですか、それ」

「あ、ごめん。失礼だね」

そんな私に、彼はふっと笑った。赤ちゃんがたまに見せる笑顔の様。

「はい、どつぞ」

手渡された花束からは、花の良い香りが漂った。

「本当にいいの？」

「受け取って下さい」

こんな人に早く出会えていれば、私は少しでも変わっていたらどうか？

携帯の着信音が鳴った。

彼がポケットから取り出したのは、私の携帯。機種、ついでにストラップ。私のだ。

「…貴方の携帯？」

「いや、さっきこの近くで拾ったんです。後で交番にでも届けようかと思って」

「それ、私の」

「え？そんなんですか？？良かった」

私に携帯を差し出す。

「ありがとう」

受け取ると、友達からの着信が4件あった。

「じゃあ…ホントにありがとう」

「…また、来てください。もっと綺麗な花、準備してますから」

「……もう、来れない」

「え？」

「実家に帰るの。男に騙されちゃって、無一文。友達に迷惑掛けるわけにはいかないし」

「そう…ですか……」

綺麗にラッピングされた花束を、私に手渡してくれた。

「ありがとう。今日は本当、嬉しかった」

花を片手に、私は心地のいい気分を外へ出た。

歩きながら、携帯で友達に電話を掛ける。数秒の呼び出し音。携帯の向こう側から、相手が電話に出るのがわかった。

『もしもし、優衣？』

「うん、ごめんんだけど、お金貸して」

「どうしたの」とかなり心配した声で聞いてくれる。こんな優しさ  
が、私の涙腺を刺激した。

私はあの男に騙されたこと、田舎へ帰って暮らすことを伝えた。暫く、男の愚痴に付き合ってくれた。自分のところでお金が貯まるまで暮らすかとも聞いてくれた。今日はいい日だ。

「ありがとう。けど、やっぱり帰るね。田舎帰ったら、またお金は返すから」

『そんな通行費くらい、いいよ。…本当は行って欲しくないんだよ、優衣？』

「いめんね」

一旦会って、お金は渡してもらうことにした。友達が働いている店に行って、お金を貸してもらった。それでも彼女は自分を止めてくれたが、それでも私は帰る意思は変わらないことを伝えた。

駅へと向かい、新幹線のある東京駅まで行き、福井行きの新幹線の切符を買った。すぐに帰る気にもならず、暫く近くを歩くことにした。

歩く足が、橋の上で止まった。天気は曇っていて、今にも雨が降り出しそうだった。

手に持っていた花を見る。綺麗。騙されたことなんてどうでも良くなるくらい。こりゃ、あの店員に感謝だ。そう思いながら、花をいろんな角度から見ようと手首を曲げる。

どのくらい時間が経っただろうか？まだ、周りは暗くならない。大丈夫だろう、新幹線には今日中に乗ればいいんだから。

「こんにちは」

後ろから話しかけられた。誰だろうと振り返ると、あの花屋の店員。

「…配達？」

「ええ。あそこで結婚式があるそうです」

彼は、200メートル程離れたある式場を指差す。

「まだ、電車の時間、大丈夫ですか？」

「うん」

「少し、話しませんか？仕事終わったんで、休憩がてら」

今、自分の中で何かが安心した。その原因の根本は、多分、この人。

「いいよ」

私の承諾を聞いて、彼はまた赤子の様な笑顔を作る。私は、この笑顔が好きだ。

彼は、私が肘を橋の柵についている状態に習うように、私の横へ来た。

「僕、酒井晶って言うんですよ」

「酒井？あなたのお父さんから引き継いだあの花屋、“藤”だったでしょ？」

「僕の父さん、母さんと駆け落ちしたんです。けど、そこでしていた仕事も捨てて逃げたので、どうにも生活していけないので、父さんの知人から譲りうけたあの花屋を経営することにしたんです。最初は“酒井”だったんですけど、その内母さんが連れ戻されて、淋しくなつた父さんが母さんの名前を花屋につけたんです」

そんな話を、軽く笑って話せてしまう彼。多分、自分の何処かでちゃんと線を引いて分別しているからなのだ。私は、この生き方を尊敬した。

「私はね…大好きな人がいたの。好きで好きで…ホストだったの。あいつ。お金巻きあげられても、私は好きで、お水の商売までしてお金作ってさあ…拳句の果てに逃げられて」

「…まだ、その人のこと、好きですか？」

「…わかんない。でも、多分その気持ちはまだどこかにあるんだろうね。だから、こんなにモヤモヤしてるんだ…」

私はまだ、境界線が引けていない。だから、笑って話せないんだね。悲しい人間だ。

「自分は好きになれないくせにね」

「僕は好きです」

「……？ありがとう」

「励まし…とかそういうので言ったんじゃないですからね」

私の方を向き直して、服の袖を掴んで、少し下を向く。

「“付き合っして下さい”…ってことです」

真剣。悪いけど、この人の真剣な顔は笑える。思わず吹き出してしまった。

「じょ…冗談じゃ無いんですよ!？」

「わ…わかつてる…あははッ!でも、私の名前も知らないのに?」

「じゃあ、何てお名前なんですか?」

「中岡優衣」

「これで、貴女の名前もわかります」

顔を片手で隠して、赤くなった頬を見せまいと必死で、女の子にこんな子がいたらきつと可愛いんだろうな、なんて思ってしまう。

「ごめん、からかってみただけッ！いいよ。もらってくれる？」

私の言葉を聞いて、照れ気味の笑顔を作る。もう、この人は笑顔くんだ。

「じゃあ、この乗車券も意味ないね」

私は大事に持っていた切符を、手で引き裂いた。

「さて、今日だけでも泊めてもらえる？住むところ、無いし」

半分冗談で言ってみたが、予想通りのリアクション。顔は赤く、遂にはしゃがんで考え込んでしまった。

「冗談、友達のとこにでも泊めてもらおうから」

「いや！！………どうぞ」

予想外の返答。

「いいの？」

「全然！！」

なんだか、中学生が恋をしているようだ。この、頻繁に変わる表情のせいだ。

「素敵」

私はそう言っつて、花束の中からオレンジの花を1本抜いて、目の前で恥ずかしがる姿がしっくりくる大の大人の頭に飾る。

「可愛い、晶？」

初めて、彼の名を呼んだ。呼ばれた男は、また笑顔を見せる。

「優衣さん」

同い年なのに。私は『さん』。でも、晶となら違和感が無い。この人に会えて良かった。純粹に、只そう思った。

花と戯れるなんて、私の今までの人生で一度でもあっただろうか。白、黄色、オレンジにピンク。綺麗と表現する以外、何も無い。「ここにいたんだ」

晶が、あくびをしながら出てきた。

「おはよ。ごめん、勝手に」

「ううん、いいよ」

「花屋さんって、店と家がかくっついてるんだね」

「うん、知らなかった？」

「知らなかった」

私はあの後、配達用の車でこの花屋まで来た後、晶が気を使って別々の部屋で寝ようと言ったので、別々の部屋で寝た。やっぱり、子どもみたい。そう、再び感じた。

「今日、仕事でも探して来るね」

「…どうして？」

「…どうしてって…いつまでも晶にお世話になっていいの？」

「いいよ。バイトの数だって増やすし」

「でも、晶だけ頑張ってる、私は何もして無いなんて駄目。せめて、服とか自分の為に使うものは、自分で払いたい。食費とかもあるしね」

「じゃあ、この花屋で働いてくれればいいよ」

「晶が店長だったら、稼げないよ。だから今日、探して来るね」

「……水商売はしないでね」

「私が水商売してたら、嫌？」

私は、店と家の境目の段差に体育座りで腰を下ろしている晶横に座った。

「そりゃ嫌だよ……だって、僕の………彼女だもん」

腕の中に顔を埋めて、恥ずかしがる。入りきらなかった耳が、真っ赤になっていた。

「わかったよ。お水はやらない、ね」

「うん！」

この瞬間に、直ぐに笑顔になる。心地よくなって、手放したく無いと思ってしまった。

隣の愛しい存在が、心の裏っ側をひつかいた。その衝動で、私はその愛しい存在にキスをしていた。晶は勿論びっくりして、私は自分からした事のくせに、恥ずかしがっていた。キスなんて、キャバ嬢をしていた時や以前の男としたりってこんな気持ちには一度もならなかったのに。

「朝ごはん……コンビニにでも買いに言って来ます！家、何も無いから」

「ありがとう……」

駄目だ。

晶が自分の隣から離れただけで胸が痛んで、頬が何とも言えない熱さに襲われて、直ぐに顔が赤くなるのがわかった。

「高卒？難しいなあ…何か資格とか持って無いの？」

「何も…無いです」

私は履歴書を作って、アルバイトの面接にいくつか回った。しかし、なかなか良い返答をしてもらえる場所は無かった。

「悪いけど、引き取ってもらえるかな？」

「…わかりました」

外に出て、自分の何も出来なさに嫌気がさす。

「…ごめんね、晶。何も出来ない彼女で」

その後、色々なバイトを探したが中々受け入れてもらえず、負け犬の様に晶の元へ帰ることにした。

「明日、遊びに出かけよう」

晶は晚ごはんのインスタントの明太子スパゲティを食べながら、そう提案した。

「…私、まだ仕事決まってる無い」

私は晚ごはんのインスタントのナポリタンを食べながら、そう返答した。

「1日くらい、遅れたって大丈夫だよ。優衣さんの服だって買わなきゃいけない。」

服は、今日と昨日着ていたワンピースと今着ている晶に貸してもらった黒のガバガバのスエットのみ。下着だって、今日お金を晶に貸してもらって買って来たのだ。

「…いいの？」

「いいよ」

どうして、ここまで人に優しく出来るのだろう。段々と、彼にハマっていくのがわかった。

こんな男の人と町を歩くなんて、考えてもみなかった。私はガバガバのスエットで、歩きづらいのに、晶は歩く速度が競歩並に速い。

「晶、速い！」

「1」…「1」めんツ……」

慌てて止まって、私が自分に追いついのを待ってくれる。

「一番に服買って着替えたい」

「うん。優衣さんのしたいようにすればいいよ」

ああ、この笑顔。私もこんな笑顔で、こんな人に優しく出来るのだろうか？

私は彼が、凄く人生を有意義に過ごしている人間にしか見えなかった。

私達は小さな服屋に入って、数着服を買って着替え直した。『お金は返さなくていい』と晶は言ってくれるが、それではどうにも悪い気がしてならないので、バイトが見つかったらまた返そうと思った。

「何か食べようか？」

「そうだね、もうお昼だ」

「今、一番何が食べたい？」

「ん…グラタン食べたいな。作ろうか？」

「え？本当！？僕、グラタンすっごい好き」

『今日のごはんは貴方の大好物よ』とママに言われて喜ぶ子どもの様。

「この近く、スーパーあった？」

「うん！あるよ」

「じゃあ、いる材料買って帰ろうか」

笑って、大きくうなづく。

なんだか、凄く【幸せ】って感じがした。

「優衣？」

ビクツと、身体が反応する声。

怖い。

だけど、今は横に晶がいる。私はゆっくりと振り返った。

「……大吾」

確認して、私はぎゅっと手を握り締めた。

「何だよー。お前、あんだだけ俺の事好きだって言っというて、新しい男もう作ったのか？」

手が汗ばむ。

早く。

どこかへ行ってよ

「へえ…こんな年下が良かったのか？」

止めて。

声を聞かせないで

「今から、まだ付き合ってくれって言っただったら、考えてやって

もいぞ。あ？」

もう、止めて

！！

ガッ…

何かの鈍い音がる。音のなる方に目を向ける。

「……！晶ッ…！！」

晶が大吾の頬を殴っていた。晶の顔は、今までに見たことの無い、怒った顔。

「何すんだお前！！！」

大吾が、晶にやり返す。また、鈍い音がる。思わず目を瞑ってしまった。晶ももう一度拳を大吾にぶつける。

「優衣さんがどれだけあなたの事、好きだったか知らないだろ！！どれだけ、優衣さんがあなたの事で悩んだか知らないだろ！！」

「晶…」

「優衣さんに近付くな！！」

何だよ。

晶。

あんだ、カツコ良すぎ。

ポロポロ流れる涙は、初めて見る晶が怒る姿をぼやかせた。

「お前ら、何してる……！」

パトロール中の警察官に、見つかってしまった。大吾は直ぐにそれに気付き、逃げ出した。

「優衣さん！逃げよ」

晶は、私の手を取って走り出した。晶も汗ばんでいたのか、手が湿っていた。

警察官が見えなくなった。

「晶ッ！もう追って来ないよ……！」

私の声を聞いた瞬間、晶は私を自分の胸まで引っ張り、私は晶に抱きしめられた。

「……ごめん」

「どごして謝るの」

「だって…優衣さんの為に何も出来なかった…」

声が震えていた。

「うっん、嬉しい」

「悔しかったんだよ……」この人が、優衣さんの好きな人なんだ  
って思うと」

「違うよ」

私は、晶の顔を目の前に持ってきて、両頬を両手で包んだ。泣き顔も、予想通り子どもみたいだった。

「私の好きな人は、晶だよ」

ねえ。

晶みたいな笑顔、出来てる？貴方はこうやって私を助けてくれたんだよ。

再び、私にしがみついて、声を押し殺して泣く晶。

「ありがとう」

私は、もうこれ以上に好きな人は出来ないだろうなと感じた。

「緊張してる？」

「…そりゃするよ」

「やっぱり童貞だったんだ」

「ごめん…経験無くって……」

布団の上でするなんて、初めてだった。けど、相手が晶っただけでこんなにも違うんだ。

二人とも下着姿で、私が下に寝転がって、晶が馬状態で私の上にならずといる。

「脱がさないの？」

「…待つて」

「さっきから、このまま30分は経ってる」

「ごめん…失敗しても、嫌いになんないで……」

「大丈夫。大好きだよ、晶」

「…うん！」

初めての晶からのキス。

こんなにも嬉しくて、こんなにも幸せな事は何も無いよ。

あれから半月。私はバイト先も決まって、晶も花屋を本職として経営することになった。

「今日、バイト休みなの。花屋、手伝うね」

朝ごはんを食べながら、晶にそう伝える。しかし、晶からの返事は無い。晶を見ると、お箸を持った手で頭を抱えていた。

「……晶？」

「う、うん。ごめん、聞いて無かった。何？」

「どうしたの？」

「ちょっと、最近頭が少し痛いだけだから。大丈夫」  
何て言っている晶の顔色は、かなり悪い。

「病院、行つて来て」

「大丈夫だよ。花屋だってあるし……」

「行つて来て。花屋だったら私が店番してる」

晶の言葉を遮る様に、念を押して言う。

「…わかった。じゃあ、優衣さんに任せるよ」

その日は、無事店番も終わったところに晶も帰って来て、検査結果は一週間後にわかるらしい。

一週間後、私達は二人で検査結果を聞きに行った。

「診断結果ですが…後ろの方はご家族でしょうか？」

医者と向かい合って座っている晶の後ろで、私は立っていた。

「違いますけど」

「この方には、診断結果を聞かれても大丈夫ですか？」

「別に構いませんけど…」

「そうですか。では、貴方の病名ですが…」

医者は、机の上に乗せてあったカルテを見て、口を開いた。

「リンパ線癌です。」

大きなめまいに襲われた。

「…かなり、進行しています。治療の為、入院して下さい」

「…それは、治る見込みがあるってことですか？」

晶は私より冷静だった。私はただ、おろおろとしているだけなのに。

「“ 確実 ” ではありません。しかし、治療で克服された方もおられます」

私は未だに状況を受け止めていなかった。

家に、入院の準備を取りに帰って、晶の服を鞆に入れている途中で、状況を呑み込み、涙が溢れてきた。

「ね、歯ブラシも持ってかなきゃいけないのかな……………優衣さん？」

あんたの事なのに。

なんでそんなに呑気なの。

私は耐えられなくなって、晶に精一杯しがみついた。

「…………大丈夫だよ。泣かないでよ」

いつの間にか、私と晶の立場は逆転されて、晶は私にとって何より強い存在になっていた。

でも、『泣くな』と言われても、涙は出てきてしまって、止まることは無かった。

晶が入院して数週間。保険に入っていなかった彼にはお金が必要だった。花屋だけじゃ入院費や治療費を補えなくなって来た。

「バイト…増やそうかな…………」

病院に向かう途中、そう呟いてみた。

「お金、欲しいの？」

いきなり、話し掛けて来た明らかにキャバ誘いの男。

「君なら、なかなか売れると思うんだよね」

以前、晶が言っていた言葉を思う。けれど、貯金も底をつき始めた。

晶が治るまでなら…黙っていても大丈夫かな……

「どこのお店ですか？」

私は決心した。

男について行くと、そこはキャバクラではなくイメクラだった。

「嫌だった？」

中に入るのを渋っている私を見て、問いかけた。

晶の笑った時の顔が、頭の中によぎる。

「よろしくお願いします」

痛む胸は、必死に抑えこんだ。

晶と付き合ってから、初めて晶以外の男とのセックスは、気持ち良くも無く、胸の痛みを強くさせるだけだった。

「大分、進行が進んでいます。副作用がありますが、抗がん剤を投与しようと思います。どうですか？こちらとしては、抗がん剤の投与は本人の決断で決めたいのですが……」

抗がん剤。テレビのドラマ等でしか聞いたことの無かった薬。

「……ハゲたり……するんですね？」

深刻な話にも関わらず、軽く笑って話す晶。

「はい。脱毛や吐き気、体の痛みも引き起こしますが、かなりの効果を得られます」

「……少し、考えて良いですか？」

「ええ、よく考えて下さい」

病室に戻って、晶はベッドに座り、私はその隣の鉄パイプ椅子に座った。

「……効果があるんだったら、しようよ。抗がん剤」

「……」

「晶！」

「…優衣さん。もう、これ以上治療続けても駄目なんだよ。それにきつと、そんなお金も無い」

「大丈夫！バイトも増やしたし、花屋だって結構お客さん、来てるんだし」

「今度は優衣さんが体を壊す。…そんなの、嫌なんだ。僕」

「ここでも笑顔なのね。」

馬鹿。

どうして笑うの？

私が馬鹿みたい。

貴方の事なのに、

貴方は笑って

私は泣いて

「…私は、晶が死んじゃうことが、一番嫌だよ……お願い、治療を続けて」

「……ありがと、優衣さん。じゃあ、僕に頑張らせてくれる？」

「うん……！」

良かった。

ただ、それだけだった。

『優衣ちゃん、指名です』

電話で、指名されたのを伝えられた。

晶が抗がん剤を初めて早くも一ヶ月が経った。激しく衰弱し始めて、髪の毛も抜け落ち、坊主頭にした。もともと細かった体はもつと細くなっていった。どれだけ自分が弱まって行っても、笑顔でいる晶。そんな彼の強さは、私の苦しみにプラスされるだけだった。扉の開く音がした。営業スマイルを作って、客の方を向く。

「こんばんは……」

「優衣さん」

晶。

「……なんで……？」

「……友達が、教えてくれた」

「……」

杖をつき、衰弱した体を引きずって、私と向かい合わせで座った。晶は細い細い腕で、私を強く抱きしめた。

「……嫌だって……言ったじゃん……」

「……」

黙っていることしか、出来なかった。今、声を出せば涙が溢れてしまふ。

「…ごめん」

…何が？

小さな声で、呟く様に、涙が出ないギリギリの声で問いかける。

「…前よりずっと、細くなってる」

…晶だって

「…それに、悔しいんだよ。自分が『嫌だ』って言った事なのに、自分の為にさせるなんてさあ……男のクセに、情けなすぎるんだよ」

…うつん、約束破ってごめんなさい

心の奥底で、ギリギリまで溜まっていた物が、溢れ出てきてしまった。

溢れた物が、晶の肩を濡らす。

以前の貴方は、ここで泣いていたくせに、私の頭を撫でる余裕まであるんだね。

私は、姉夫婦にお金を借りることにした。晶の癌が治ったら、働いて返すと言う条件で。

相変わらず、晶はどれだけ気分が悪くても、笑っていた。

ある日、手帳を開くと、生理がもう二ヶ月は来ていないことに気が付く。

「……………もしかして」

私は産婦人科を訪れた。

そこでの聞いた言葉は…

「おめでとうございます、妊娠二ヶ月です」

二ヶ月前。私と晶が出会って、最初にした時と重なる。

「…晶の……………子ども…?」

私は、大きな声を出して病院内なのに大喜びしてしまった。急いで、タクシーで病院に向かう。病室に入ると、いつもの笑顔が私を迎えてくれた。

「どうしたの? すっごい笑顔」

「お腹に、赤ちゃんがいるの」

「……………え! ?」

「私達の」

「わ……僕がお父さん…?」

「うん!」

晶が、私を引き寄せて抱きつく。

「ありがとう」

「…だから、晶。生きてね。子どもにお父さんは居ないんだよ、なんて言うの嫌だからね、私」

頷く彼の今日の笑顔は、今まで見て来た中で、最高だった。

「この服、可愛いでしょ？女の子だったら、絶対にこれを着させてあげたいの」

「うん、凄く可愛い」

妊娠がわかったとなると、生まれた後の計画ばかりが立てられて行く。

「名前はどうしようか？」

晶が、そう問いかけた。

「ホントだ。生まれてから、何週間かで決定しなきゃいけないんだよね…決めとこうか」

「男の子でも女の子でも、つけられる名前にしよう」

「そっだね」

幸せだった。

男に騙されていたあの時の自分は、こんな私でもこんなにも大きな幸せが手に入る事を予想していただろうか？

「あ、バイト行かなくきゃ。行ってくるね」

「…無理しないでね」

「わかってるよ！じゃあね」

手を振ると、晶も返してくれる。これだけで、少しくらい無理しても、なかなかくじけない様になった。

エレベーターを降りて、玄関まで行く間の廊下で、二人の看護婦の話が耳に飛び込んで来た。

「リンパ線癌の酒井晶さん、他のところにも転移してて、あと持って二ヶ月弱らしいわよ」

耳を疑った。

「結構可愛い子だったのにね。先生が余命伝えても、笑っててさあ…彼女がいたじゃない？あの子もかわいそうに」

…二ヶ月？

晶、知ってたの？

何よ…それ…

「…………？優衣さん、バイトじゃないの？」

いきなり、部屋に戻って来た私に少し驚いて、直ぐに笑う。その笑顔は、私に悟られない様に作ってるのね。

「どうして…黙ってるの？」

「何を？」

「嘘つき。赤ちゃんが生まれるまで、生きられ無いくせに」

「なにそれ？知らない」

「最近の看護婦さんってお喋りだね。余命聞いても笑ってたんでしょ？」

隠しきれないとわかったのが、晶は小さく笑った。

「優衣さん、こっち来て」

自分の座っているベッドの空いている場所を、ポンポンと軽く叩く。私は、ベッドに近づく。

「こんな物、渡されても困るだけかなあって渡さなかったんだけど、

「一応、渡すね。嫌だったら嫌って言ってよ」

小さい、白色の四角いケース。渡されて、中を空けると、何も装束されていないシルバーリングが入っていた。

「僕と結婚して下さい」

何も考えずに、涙を流しながら晶に抱きついて何度も頷いた。どうして、こんなにもこの人は私を泣かせるのだらうと不満を抱きながら、泣いた。

「拓海」

「赤ちゃんの名前？」

「うん。男の子でも女の子でも使える」

余命あと一ヶ月強。私は、まだ大丈夫だと勝手に確信していた。

「……………あ……………ッー!!」

いきなり、胸を手で抑える晶。

「どうしたの？晶!？」

私は何をしていたか分からず、近くに置いてあったナースコールの

ボタンを強く押した。

看護婦がくるまで、私は何も出来なかった。

晶は集中治療室に運ばれた。治療が終わるのを待つ私に、看護婦が教えた。

「もう……晶、死ぬんですか………？」

そんな。

まだ、子どもが生まれるまで半年は生きてもらいたいのに。

『何か話しますか？』と医者が出てきて、私を集中治療室へ入れてくれた。

ベッドの上で目を瞑っている晶は、やはり子どもの様だ。

「……優衣さん」

「なんで、こんな時まで笑ってるの」

「こづいつ時だからこそ、わらわなきゃ」

けれど、今までの笑顔ではなく、薄く溢れた必死笑いだった。

「……ごめん……約束、守れそうにないや」

「やだ……」

私は床に膝をつけ、ベッドに肘をつけて晶の手を強く握った。

「…私、未亡人でシングルマザーになっちゃっうじゃない」

「じゃあ、いまから婚約破棄する？」

「それだけは絶対にやだ」

涙なんて、最近は流しすぎで気にならなくなった。

「きつとね、優衣さんのお腹の中の子どもは女の子。優衣さんに凄く似てるんだ。それで、僕の生まれ変わりがその子に恋をするんだよ」

「絶対に？」

「絶対に。僕がそうだったんだもん。その僕の生まれ変わりは、何年経ってもその女の子を愛し続けるよ」

「……………うん」

苦しい。

今までの…否、これから起こるどんな事よりも。

「やっぱりさあ…どれだけ笑っていても、死ぬのは怖いんだね……」

癌になって初めて、晶が見せた泣き顔。

不安で一杯だったんじゃない。

カッコつけて、一人で抱え込んだじゃうから。

「ありきたりな言葉かもしれないけれど、優衣に会えて本当に良かったよ」

「私も、そう思う」

「子どもに…拓海に言っといて」

「…なんて」

「ごめんね…って」

小さい二つの呼吸音が、一つになった。

「ほら、早く帰って来ないとお母さんがケーキ全部、食べちゃうか  
ら」

「まってよ、おかあさん」

緑が生い茂る原っぱに、母とまだ小さくおぼつかない足取りの女の子。

「あなた、だあれ？」

女の子の前に、オレンジ色の花を持った男の子が一人立っている。

「ぼく、きみがすきなんだ」

そう言って、花を女の子に手渡す。

「わたしのなまえ、しらないの？」

「なんていうなまえなの？」

「たくみだよ」

「じゃあ、いまわかったよ」

\* e n d \*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8239b/>

---

cry

2011年2月14日10時52分発行